

流されてカルデア

三島溪山

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

流されながら行き着いたのはカルデアのマスター候補。生き残るために頑張るオリ
主の話。

目次

プロローグ	1
冬木	
第一話	5
第二話	15
第三話	22
第四話	31
幕間 1	
第五話	39
第六話	48

プロローグ

「牛若丸、まかりこしました。武士として誠心誠意、尽くさせていただきます」
目の前に映るこいつとこの光景が、自分がやつぱりあの世界Fateに転生してしまったのだと実感させてくれた。

俺が送っていたのは特筆することのない人生：学校行って、バイトして、進学して、就職して、働く、どこにでもいる社会人だった。それがひっくり返ったのは32歳の頃だ。多分前後不注意で車に轢かれた。死の間際に何か願った気がするが覚えてない。

気付けば小さくなっていった。今は名の知れた家の次男坊らしい。前世の記憶を自覚した5歳からそれに引きずられ、捻くれた。精神年齢の件でそりが合わず、孤高(笑)の存在になっていた。前世の焼き増しどころか前世より酷くなった。

6歳から魔術なるものを学んだ。魔法リリカルとどう違うのかといえど『その時代の文明の力で再現できる奇跡かどうか』らしく、文明が発達すればするほど魔法の数は減るとかなんとか。なまじ前世の記憶が悪かったのか、小難しいことは気にせずに魔術に傾倒した。男はいつまでも厨二。

15歳になり、当主である父に外を見に行けとケツを蹴られて時計塔なる魔術の教育機関に入学した。このときやつとFate時空だと気付いたが時既に遅し。安穩な日々にも遂に終止符つて寸法。血統を重視する魑魅魍魎、奇々怪々な時計塔にさながら生贄のようにドナドナくされるのであった。あ、遠目に遠坂家の凜ちゃんを見たよ！

20歳になり、5年に及ぶ全体基礎を学び終わる頃、進路に迷っていた。そもそも第二子である俺は魔術刻印を受け取る事はなく、実家の魔術特性に沿う必要のない俺。気晴らしにロンドンでも散歩すると死徒に出くわしました。あ：ありのまま（ry

霧の都RONDONで五年かけて作った魔術^{ナイフ}礼装を両手に強化の魔術を足にスタコラサツサと逃げるも流石は死徒、人間を超越した吸血種だ。代行者仕事しろや（白目）と思いつながら逃げる俺（の血）を求めて追いかけてくる姿はストレイツオより怖い。

路地裏の曲がり角で相手が俺を見失う一瞬に反転。まずは金的、次も金的、懺悔しやがれ、これがとどめの金的だ！金玉をザクザク切り裂き、一瞬で頭を破裂させる。貴様の敗因はたった一つ、てめーは金玉を持っていた。

^{TOKIOMI}優雅な一時を邪魔され、筋肉痛かつ不機嫌なまま時計塔に帰還するも待つていたのは代行者への片道切符。いくら名門と言えど所詮次男坊。兄みたいなまともな（魔術師的に）研究者が生きていれば実家も問題ないわけで。そもそも仲が壊滅的に悪い時計塔と聖堂教会がこんな早く取引を終えるなんて何かの陰謀を感じ（ry

時計塔から聖堂教会に移籍した俺は洗礼後、すぐに代行者へと身を費やした。概念武装『黒鍵』と魔術礼装『良く切れるナイフ』で死徒狩りに連行される。死にかける散々な日々だった。できれば思い出したくない。

25歳になった年、死徒狩りに身も心も削る俺に転機が訪れた。何か：『カルデア』？という組織に向らしい。理由は出資先の要望だとか。何をするか全くもってわからんが拒否権などなく雪山へ出向く。前世での流され体質は世界を越えても変わらないものらしい。

カルデアについて一ヶ月、いよいよカルデア初のレイシフトに挑むらしい。その説明会を俺を含めた四十八人のマスター候補全員でやっていたが最後のマスター候補が途中で追い出された。カルデアの所長である『オルガマリー・アニメスフィア』は時計塔のロードを輩出した名門中の名門として知られるアニメスフィア家の当主だ。気難しい性格で俺も付き合い難い人間と思っている。

俺は何となく彼のが気になる、トイレと断つてその場を抜け出す。廊下を駆けながら彼を探していると突然視界が赤く染まり、爆音が鼓膜を響かせる。黒鍵とナイフを構えて周囲を見回すと赤いランプと警告音を知覚した。どうやら異常事態らしい。

駆け抜けてきた彼『具志堅大樹』と一緒に中央管制室に到着する。爆発の代償か施設の所々がボロボロで建物が形を保っていることに驚きながらも彼の言う『マシユ・キリ

エライト』を探す。周囲を探索すると放送が鳴り響き、視界が目を覆った。ただただ流されるだけの自分を呪いながら身を任すしかなかった。

ここから示すは二人のマスター候補と一人のデミ・サーヴァント、それに一匹が紡ぐストーリーである。

冬木

第一話

目を開けるとまた赤が視界に移る。その場を飛び起きて武装して気配を探る。自身に危険はないと判断しつつも武装を解かず、彼を探す。数分ぐらい周囲を探索すればそこには彼と見知らぬ女の子が謎の骸骨に襲われていた。取り敢えず死徒狩りで培った戦闘法で加勢することにした。

「加勢する」

「っ!? あ、あなたは」

「無駄口は後でいい」

「は、はい!」

魔術礼装ナイフと強化の魔術で難なく骸骨を切り裂く。女の子の方も盾で殴打を加えている。数分もせずに骸骨を駆逐した。

「駆逐完了。戦闘を終了する」

「あ、ありがとうございます」

「気にすることはない。彼の知り合いなのだろうか?」

「先輩のことですか？確かに顔は互いに見知ってますが…：そういうえばお怪我はないですか先輩？」

「あ、うん、大丈夫。ありがとうございます。えくと…：そういうえば名前を名乗ってなかったな。」

「聖堂教会から出向してきた代行者、藤代航太だ」

「マシユ・キリエライトです」

「藤代さんありがとうございます。代行者というのは…」

「簡単に言えば聖堂教会の教義に反する者を狩る戦闘職だ。あの程度なら簡単に倒せる」

死徒に比べると脆すぎると思うが彼等にとつては驚きの範疇らしい。

『ああ、やっと繋がった！こちらはカルデア管制室だ、応答頼む！』

「こちらAチームメンバー、マシユ・キリエライトです。現在、特異点Fにシフト完了しました。藤代航太、具志堅大樹、両者に心身の異常は見られません。正式な調査員として登録してください」

『やっぱり二人ともレイシフトしてたのか…：コフィンなしでよく意味消失に耐えてくれた』

ドクター・ロマンは素直にこちらを心配している。所長とは大違いだ。その後も状況

交換し、キリエライトが謎のサーヴァントと融合したこと、俺達以外にレイシフトした人間がいないこと、通信の為に2 km先の霊脈ポイントまで移動してほしいなど伝えて通信が途切れた。

「通信消えちゃったね…」

「ドクターの言う通りに移動しましょう。いつまでもここに留まっても仕方ありません」

「そうだな。キリエライトを先頭に、大樹、俺の順に移動しよう」

異論がないのか二人とも頷いてドクターが示したポイントに移動する。順番はただ戦闘のできる存在を前後に置きたかっただけだ。

「見渡すかぎりの炎、資料の中のフウキとはまるで違います。待機中の魔力マナ濃度も現世のものとは考えられません」

「…これは俺達がいた地球の過去というわけじゃないのかもな」

「どういうことですか？」

「過去があるから今があり未来がある。その過去に一石投じれば波紋が生まれ水面を揺らす。大きな波紋となれば今や未来に大きな影響がくる」

「…ではフウキに今の人類の滅ぶ原因が生まれたからそれらを探すのが私たちの役目、ですか」

「当初の試みはそのようなものだったけど、だいぶバイオレンスになっている」
問題は誰が過去を改竄したか……そう思考の海に嵌まっていると人間の悲鳴が聞こえた。

「今のは……女性の悲鳴ですね。急ぎましょう！」

急いで悲鳴のポイントに向かうと所長がさっきの骸骨に追われていた。所長が何故ここにいるのかは不明だが助けておこう。

「キリエライトと俺で迎撃する！大樹は後方で所長を確保しろ！」

「はい！」

黒鍵と魔術礼装ナイフを両手に骸骨を駆逐する。慣れた手つきで骨の接着部分を解体し、武装を無効化後、蹴飛ばして粉々にする。何体か壊していると数が少なくなりキリエライトが所長に歩み寄って状況を説明する。俺が残りを片付けた後にはある程度の説明は終わっていた。周囲を見回しながらキリエライトに近寄る。

「この街のレイポイントは所長の真下みたいですね」

「では、そこに貴方の盾を置いてちょうだい。宝具を触媒にして召喚サークルを設置するわ」

「分かりました。それでは始めます」

キリエライトが盾を地面に置けばカルデアの召喚実験場が投影される。

『シーキューシーキュー。もしもし!? よし、通信が戻ったぞ!』

それからは所長とドクターとで状況交換が行われる。俺はそれに必要ないと思い、その場を離れて周囲を警戒する。俺はただの戦闘員であり、カルデアの施設や研究員などを聞いたところで役に立たないだろう。暫くそうしているとキリエライトが近づいてきた。

「藤代さん、通信終わりました」

「ああ」

「…何故藤代さんは通信を聞かなかったのですか?」

「聞く必要がない。所長が音頭をとるならそれに従っていればいいし、通信中の俺達は無防備だったから警戒していた」

「なるほど…」

俺に指揮の経験はないし、所長は命令しての方が気分を害さず面倒でなくていい。さっさと合流しよう。

「見回りご苦労だったわ。ほら行くわよ」

「どこに行くんだ…?」

「…所長は橋に移動しようとしています」

「橋か」

冬木大橋。未遠川を跨ぎ、深山町と新都結ぶ大きな橋で交通の要所となる場所。手始めにこの橋から人類絶滅の原因を探索するつもりなんだろう。2004年のフキナstay nightの聖杯戦争で円蔵山の大聖杯が原因だろうが根拠に乏しいし黙ってついて行く。所長が何も知らない大樹に講義し、時々骸骨に襲われながらも橋を調べる。

「特にめばしいものはなかったわね。次に行きましょう」

その後も港跡、教会跡を調べるが焼け野原が続くだけで骸骨しかなかった。俺としては言峰綺礼がこの程度で死ぬ奴じゃないと思うのだが……ん？

「藤代さんどうかしましたか？」

「いや、何でもない」

瓦礫の下から見つかったロザリオを懐に仕舞う。場所から愉悦神父のものだろう。後で調べておくか。

「マシユも戦闘慣れしてきたわね。サーヴァントとしてやっていけそうじゃない？」

「そう……ですかね。まだ実感が湧きませんが……」

『四人ともすぐ逃げるんだ！まだ反応が残っている！しかもこれは!?!』

「な、まさかあれって!?!」

サーヴァントだ。真っ黒で見えにくいのが、バイザーを両目に被せた麗しい長身の美

女。あれはライダー・メドゥーサ！

『まだマシユにサーヴァント戦は早いよ！』

「だが、逃げられる雰囲気じゃない様だな」

「マシユ、迎撃しなさい！相手は同じサーヴァントよ！」

キリエライトが盾を構えて戦闘の準備をする。俺は隣に立ち黒鍵を構える

「キリエライト、相手の目に気をつける。バイザーを取らせたら負けと思え」

「え…」

「戦闘でも外さないバイザーの下には強力な魔眼が隠されている可能性が高い。それにああいうなりでもこっちの居場所がわかる手段があるだろう」

「はい、分かりました」

「所長！」

「何よ！」

俺は後ろで震えている所長の足元にレイシフト前に配られた呼符を投げる。

「こ、これは呼符!?!」

「レイシフト前に配った奴です！大樹にこれの使い方を教えてサーヴァントを召喚させてください！サーヴァントが何体いるかわからない以上素早く戦力を整える必要があります！」

「わ、わ、分かったわ！具志堅！」

「はい！」

所長と大樹が慌ただしく動くときライダーもそれを察知してかこちらに駆けてくる。

「キリエライト！」

「はい！戦闘開始します！」

「！！」

早速黒鍵を投擲するが鎖が付いた短剣で弾いてくる。キリエライトは弾いた短剣を持つ右手を殴打しようとする。勿論空いた左手で防ごうとするが距離を詰めた俺が魔術礼装で切りかかる。即座に反応してくるがその間に盾による殴打が右手に決まる。

「！！」

「こつちを忘れるなよ」

痛みで動きが止まる一瞬を狙うがかするだけで後退を許してしまう。傷つけられた激昂か執拗にキリエライトを狙おうとする。

「つく……！」

「！！」

黒鍵でカバーするが最小限で抑えられる。盾で捌いていくが相当なプレッシャーがかかっているだろう。ミスをする前に指示を出す。

「盾の丸みで攻撃を受け流せ！ 当たる瞬間に盾を斜め左に引いてみる！」

勝負は一瞬。相手の左手の短剣がギリエライトを襲うが俺の指示通りに盾を引く。突き出す形になった左手は受け流された結果伸びきってしまう。俺は右側から奴の首を突き穿とうと突進する。奴の右手は俺を迎撃しようとするが先に投擲した黒鍵が短剣の道を阻む。

「これで終わりだ！」

「——!!?」

一度止まった短剣が俺に届くことはなく、喉笛にナイフが穿たれる。そのまま胴体と首を切り離すと霧の様にサーヴァントが散っていく。散った跡には何か石のようなものが落ちていたので拾っておく。

「はあ——はあ——、か、勝った…?」

『いや、まだ終わってない！ 同じ反応がこちらに向かってくる！』

「なんですって!?!」

「召喚は済んだか!?!」

「はい！ クラスはあ、アーチャーらしいです」

「アーチャー!?!」

「ああ、私はそのアーチャーだ。事情は聞いている」

そこにいたのは浅黒い肌をした白髪の青年だった。ヒヤッホーエミヤダー！後でサインもらおうと固く誓って経験豊富なエミヤに意見を聞く。

「疲弊している戦闘員二人と非戦闘員二人とあんだ、敵はサーヴァントが多くても二体だ。アーチャー、撤退か迎撃か」

「迎撃だな。並の人間ではサーヴァントに追い付かれる。数で優っているなら足を止めた方が無駄な体力の消費もない」

「だそうだ。どうします所長？」

「…マシユ、もう一踏ん張りしなさい。アーチャーのサーヴァントなら実戦経験も豊富でしょう。ならばここは彼の言うことを聞くべきだわ」

「頑張つてマシユ！」

「分かりました所長、先輩。必ずや勝利を！」

『来るよ！』

襲いかかってくるサーヴァント迎撃のため、三人は武装を構える。

第二話

現れたのはアサシンと背中に武器背負った長身の男だった。異様に腕が長く大きく奇怪なのは呪腕のハサンだろうが、もう片方は誰だ…？

「アーチャー」

「ふむ…君達はアサシンの方を頼む。あの腕は少々厄介でな、決して直接触れられない。それだけを心がけろ」

「はい！」

そう言つてアーチャーはクラスが分からないサーヴァントに突っ込む。多分だが奴らを引き離す為だろう。

「話し合いハ終ワツタカ？」

「態々待つてくれるとは有り難い」

「未熟者ノ足掻キホド面白イモノハナイ！」

ツチ、心の中で舌打ちする。確かに奴の言う通りだ。例えば人数で優つても経験やステータスの差で戦況はひっくり返る。こっちは切札は愚か、切れる手札すら限られている。

「…それでも戦うしかありません。死中に活を見いだします!」

「…ああ、そうだな。結果はやるまで分からんか」

「ハ、死んだゾ小娘…!」

そう言つてアサシンは俺達に短剣ダークを投げつける。だがそれは空中で弾け飛んだ。

「又ウ…!何者ダ…!」

「何者つて…そんぐらい見ればわかるだろ。目ん玉まで腐つたかご同輩?」

「貴様、キャスター!ナゼ我々ノ邪魔ヲスル!」

「あ?そりやお前らが気に入らねえからに決まつてんだろ」

「キャスター…?何か風貌というか今までのサーヴァント違いますね…」

ありゃクー・フリーンか…?全身青タイツじゃないから分らんが似ているな。

「そのの嬢ちゃんに小僧、気張つて構えな。番狂わせの可能性は十分あるぜ」

「は…はい!頑張ります!」

「坊主がマスターかい?自ら戦場に立つなんて見上げた野郎じゃねえか」

「生憎キリエライトのマスターはあつちでアーチャーを見ている」

「アーチャー?...げ」

「キャスター?」

この反応はクー・フリーンだな。エミヤとは水と油みたいな関係だし。

「まあいい。故有つて奴さんとは敵対中だね。敵の敵は味方つてワケじゃないが今だけ信頼してもらつていいぜ」

「では後衛は頼む。行くぞキリエライト！」

「はい！」

*

キヤスターの助力を得て何とかアサシンを撃破した。疲労困憊でキリエライトは肩を息をし、盾を支えにしている。

「キヤスター…キサマアアアアアア…!!」

恨み言を残しながら霧となつて消えるアサシン。そこに残るカラフルな石を拾つてアーチャーの様子を見る。どうやらあちらも終わったようで所長の所に集まる。

「所長、戦闘…終了しました」

「…ちよつと、そのサーヴァントは誰よ」

『まあまあ所長、彼はまともな英霊の様だ。事情を聴いてみよう』

「おつ、話が早い奴がいるじゃねえか。ほらそつちの事情を話してみろよ」

ドクターがキャスターにカルデアの事情を話す。次にキャスターはこの地で起きた聖杯戦争の状況を話す。どうやらキャスターを除く五騎はセイバーに倒され、黒く使役されているらしい。キャスターを殺害し、聖杯戦争を終わらすという目的のために。

「手っ取り早い話、手を組もうぜ。利害はお互いに一致しているんだ。いいだろ?」

「…それが合理的な判断ね。それで貴方はどちらをマスターにするの?」

「そりゃこつちの坊主だろ。あそこの坊主は既に二騎も従えているみたいだしな」

「決まりね。藤代、そいつをうまく使つて見せなさい」

「この街限定の契約だが、よろしく頼むぜマスター」

*

その後もフユキが特異点になった原因をキャスターから聞いたたり、キリエライトの宝具出現の為に特訓したり、骸骨倒したりで色々濃い一日だった。今は火災の影響が少ない住宅で休んでいる。どうせ人間なんていないのだから勝手に食料拝借して英気を養った。所長、キリエライトは休んでいる。

「所長とキリエライトの様子は?」

「二人ともぐつつすり寝ているよ」

「まつ、そうだろうよ。無茶やったから暫く寝かせてやれ」

「無茶したのは主にキャスターのせいだな」

「あ?」

「まあまあ…」

煽るアーチャーにすぐ喧嘩腰になるキャスターを諫める大樹。協力し合うマスターってのはサーヴアント同士の相性も良くないといけないみたいだ。目の前の光景にそう思ってしまう。

「そういうマスターは前線で戦えるみたいだな」

「まあ不本意ながらな。アーチャー来るまでキリエライトだけに戦わすのも…」

「代行者なんだっけ」

「代行者…うっ」

「アーチャー?」

麻婆神父の事トラウマなのかね。むしろキャスターが苦手意識を持つべきだろうに。自害せよランサー（笑）

「時計塔に所属してたが死徒を倒してから何故か聖堂教会に移籍してな。訳のわからん宗教の教えを律儀に守って化け物退治だよ。最初の一年は死にそうだった」

「待て…色々とおかしいがひとまず置いておこう。人の身で死徒を倒す時点で…人間

か？」

「男の弱点突き刺したただけだ」

「「あっ」」

あの時は何も感じなかったけどあれほどあつさりやられると人類の上位種と思えないな。同僚にも怪訝な目で見られた。

「まああれだけ戦えれば後衛としてはありがたいね。槍を持つてればマスターに戦わす事もないんだが」

「槍？」

「マスター、キャスターの真名はクー・フリーンだ。ケルトの光の御子と言えば分かりやすいだろう」

「クー・フリーン？」

「…マスターは神話などに詳しくはなかったな」

まあ一般応募だし、しようがないか。

「しかし聖杯：それにアーサー王か」

「このメンバーで挑むには強敵難敵以上だろう」

「セイバーの対魔力は実に抜きづらいもんだ」

「戦力増強が一番なのだがないものねだつてもしょうがあるまい」

戦力増強か：俺はポケットを探って一枚の符を取り出す。

「もう一枚有ったんですか!？」

「ああ。これで何とかできるはず」

「私を呼び出した呼符というものか。やれやれ：サーヴァントの召喚もお手軽になったものだね」

「とりあえず呼んでみようぜ。一人増えれば戦略の幅も広がるってもんだ」

クー・フリーンに急かされ召喚の呪文を紡ぐ。

「天秤の守り手よ——!」

呼符から魔方阵が敷かれ、光が溢れる。辺りを照らした光はやがて収まり、人影がで
きる。

「牛若丸、まかりこしました。武士として誠心誠意、尽くさせていただきます」

そこには軽装過ぎる鎧を纏った少女がいた。これが義経かあ：アーサー王よろしく
日本の歴史書も間違いだらけなんだろうなあ。

第三話

源義経、幼名牛若丸。平安時代の武将であり、源頼朝の異母弟に当たる。様々な戦で勝利に導いたが、兄の不況を買って後に自刃したとwikiに書いてあった。そんな武将が目の前にいるが鎧から見てかなり個性的だ。これが俺のサーヴァントになるのか。

「俺がマスターだ」

「主殿がマスター…ですか」

「そんな難しい顔してどうした？」

「いえ、主殿に不満があるわけではありません。ありませんが…聖杯からの知識で知っているとはいえ、サーヴァント同士が仲良く火を囲む風景は信じがたいゆえ」

「あ…」

まあね…基本の聖杯戦争は総勢七人のバトルロイヤルだ。人理滅却という例外があるとはいえ、この状況にあっさり馴染む二人に驚嘆を感じているのだろう。

「こいつらはほら、特殊ってやつ？あ、BLじゃないよ」

「おい」

「BL…？」

「おい嬢ちゃんその言葉は忘れろ、なあ？」

「それだけは御免被る」

「息びったりだね二人とも…」

そうだね。犬猿の仲なのにな…でも桃太郎では仲が良かったはず。やっぱりホモじゃないか（憤怒）

「その笑みは気になるがそろそろ睡眠をとつたらどうだ？サーヴァントには必要ないが君達は人間だ」

「うーん…それもそうだね。おやすみアーチャー…」

「俺も仮眠をとる。警戒は頼むぞライダー、キャスター」

「応よ」

「お任せを」

「それとライダーに今の状況を説明しといてくれ」

そう言つて女性陣とは違う部屋で寝る二人。サーヴァントは女性もいるけどホモだから大丈夫だろう。

*

翌日、相変わらぬ外の景色を見てため息をつく。夢だつたらどれだけ良かったか。

「早起きだねえマスター」

「おはようキャスター」

「朝御飯をライダーに配膳しておくよう頼んだ。私はマシユやオルガマリーを起こしてくる」

ナチュラルに女性の寝室に行くエミヤさんばねえつす。

「おはよう…」

「大樹も起きたか」

「アーチャーは…?」

「女性陣を迎えにいつ「いやあああああああ!」「なんできー!」「た…」

ドゴオオオオンなどと爆音と悲鳴が響いた。ああ…やつぱりあいつは英霊になつてもTOLLOVEるだなあ。

「アーチャー殿の悲鳴、でありますな」

「朝からご苦労なこつたな」

朝食の風景は割愛しよう。赤い紅葉とかなかつた、いいね?

*

特異点攻略のために大聖杯安置所である円蔵山の洞窟へ向かう。瓦礫の山やねずみ色の空も見慣れ、しつかりとした足取りで石段を登る。

「もう一度説明するぜ。残る敵性サーヴァントは3体。バーサーカーは何かを守るように山に佇んでいる。残るは騎士王とアーチャーなんだが…」

「アーチャーの正体、真名はわからないと言ったわね」

「いや、ここにいる奴によく似ている。なあアーチャー?」

キヤスターに一言で皆の視線がアーチャーに突き刺さる。

「ふむ…既に別個体が召喚されていたか」

「同一存在が同時に存在するなんて…」

「いや、シャドウサーヴァントといったか、あれは既に聖杯に魔力として捧げられた英霊のデータの劣化コピーだ。厳密に言えば本体ではない…可能性としてはあるだろう」

「で?勝ち目はあんのか?」

「無論ある。自分自身と戦うのは慣れている」

キヤーエミヤサンカツコイ。でも過去の自分にやられてますよねー。

「さあ着いたぜ。この先でセイバーが待ち構えている。覚悟はいいか?」

「…ああ」

「向こうのアーチャーは私に任せて突っ切ってくれ」
 となると騎士王にはキリエライト、クー・フリーン、牛若丸で挑むのか。前衛の牛若丸とキリエライトにかかっているな。

*

向こうのアーチャーをこっちのアーチャーに任せ、大聖杯目前まで迫る。

「何よこれ…極東にこんな超抜級の魔術炉心があるなんて信じられないわ…」

「離れた場所からでも膨大な魔力を感じる…!」

「これが…特異点の原因ですか…?」

「…奴さんがこちらに気付いたようだけ」

大聖杯の前に黒い陰、黒く染まった騎士王の姿があった。普段の青いドレスではなく、黒い鎧と黒いドレスを纏った伝説の騎士王のもう一つの姿。

「――」

「…魔力放出がすごいです…あれがアーサー王…」

『ブリテンの王、聖剣の担い手アーサー王。男装しているのはマーリンの悪知恵かな? 本当に趣味が悪いね』

「女性…？あ…」

「見た目こそ華奢だが魔力放出で力を生み出す化物だからな。気抜いてるとぶっ飛ばされるぞ」

「——化物とは随分な言い草だな」

「!？」

初めて現実で聞く騎士王の声。画面越しでは伝わらない圧力を感じる。

「ほほう…その宝具は…構えろ小娘。その守りを断ち切つてやろうー!」

「来ます——マスタァー!」

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣!!!」

「ロード・カール・デア仮想宝具疑似展開／人理の礎!!!」

膨大な魔力の塊と透明な堅強たる盾がぶつかる。キリエライトは真正面からそれを受けきる為盾を支える。

「大樹! 令呪でキリエライトに命令しろ! 守れつて!」

「は、はい! マシユ、俺達を守つて!」

「はい!!」

右手の令呪が一画消えてキリエライトに魔力を回す。その魔力がキリエライトを奮い立たせる。光が発散され、数分にも満たない時間がやっと終わったと感じてしまう。

キリエライトは緊張の糸が途切れたのか膝が折れてしまう。

「耐えて見せたか。それでなければな」

「チツ、奴さん調子づいてやがる」

「ああ……こつちは二度防げる確証はないからな」

「主殿」

「ライダー、キャスター。キリエライトが戦線復帰するまで時間を稼げ。三対一なら勝率も上がるだろう」

二人は頷いて騎士王の元へ駆ける。

「アンサズ！」

「やあつ！」

「ふっ……」

キャスターが生み出した火球を切り裂き、ライダーの刀を捌く。二対一だが焦った様子はない。あの様子だといくらやっても倒せないだろう。何か意表を突くものがないと。

「マスター……」

「マッシュ！大丈夫か!？」

「はい……」

やはりキリエライトは疲弊している…初心者がエリアボスに挑んでいるんだ。何もかもが違うすぎる。でもこの子は…立ち上がる。

「航太さん…」

「今、ライダーとキャスターが抑えているが…このままでは勝ち目はほぼない」

「え…？だ、だつてライダーとキャスターは…」

「セイバーは最優のサーヴァントだ。知名度が高く、ステータスも軒並み高く、マスターの意向をくむ扱いやすいサーヴァント。それに騎士王は対魔力が高くキャスターの攻撃は宝具以外ほとんど効かないだろうし、宝具を放つ隙を作れる実力差はない。宝具同士がぶつかっても十中八九エクスカリバーが勝つ」

「そんな…」

所長は俺の考察に膝を落とし俯く。しょうがないことだ。アーチャーがいればまた戦況は変わっていただろうが待つ時間はない。それにエクスカリバーの威力はまだ上があるだろう。次は防げない。

「…絶望ばかりだがそれでも君は立てるか？戦う意志はあるか？」

「…はい！戦います！マスターの為に！」

「ふっ…」

良い目だ。俺のようなどつちつかずの半端者じゃない本物の目だ。死中に活路を見

いだす戦士の目だ。ならば行こうではないか。千分の一を掴むために。

第四話

長く続くと思われた決着も、

「キリエライト…大樹…手筈の通りに」

「はい！」

終わりは意外と早くやってきた。

「やあつ!!」

「む…」

「嬢ちゃん！」

新たな乱入者により戦闘は仕切り直され、騎士王と三人の間に多少距離があく。そこで二人に作戦を話し合う。

「…ライダーさんお願いします」

「お任せを！」

再び戦闘が開始される。これから均衡を崩し、勝負を決める。合図は大樹がキリエライトを後ろに下がらせた後！

「マシユ！」

「えいつー！」

「何っ!？」

「キャスター！ライダー！」

「おう！」

「お任せを！」

キリエライトは唯一の武器である盾を黒き騎士王に投げる。ただの自殺行為に騎士王は驚くが、それも一瞬だ。ライダーが投げられた盾とは違う方向から攻めてくるを見て、その方向に盾を弾き飛ばす。ライダーは指示した様に弾き飛ばされた盾と一緒に後退する。

「キャスター！」

「応よ！善悪問わず土に還りな！^{ウイッ}灼き^{カー}尽くす^{マン}炎の檻!!」

「なっ!？」

キャスターの宝具が真下から浮かび上がってくる。突き出された木々の巨人の腕に捕まれた騎士王は檻に入れられ、巨人とともに焼かれる。周囲の炎熱は轟々と燃え盛り、火柱を上げて騎士王を燃やし尽くす。数分間、火炎は消失しなかった。

「…見事だ、盾の娘に光の御子。やはり私は一人では何も変えられないらしい」

「あ？どういう意味だそりゃあ？」

「いずれ分かる。グラントオーダーはまだ序章に過ぎない…聖杯を巡る旅は今まさに始まろうとしている…」

「!？」

「おい、ちよつとま…!」

騎士王とキャスターが光の粒子となつていく。聖杯の軛から放たれ、座に帰ろうとしている。俺達はやつと彼女に勝利できたことが分かる。どこかで約束された勝利の剣が放たれれば俺達は終わっていただろう。

「これでお終いか。マスター、坊主！今度縁があればランサーとして呼んでくれや!」
「…ああ」

騎士王もキャスターも完全に消え、残った聖杯を確保する。直接見るのは初めてだが、サーヴァント六騎分の魔力が籠った聖杯は今にも溢れそうだ。

「セイバー、キャスター、両名の消滅を確認しました。私達の勝利ですな先輩。聖杯も確保しました」

『よし、それで特異点Fの原因は取り除かれたよ。帰還の準備を…所長?』

「グラントオーダー冠位指定…何でサーヴァントがその呼称を…?」

「どうかしましたか所長?」

「え?あ、そうね。よくやったわ、マシユ、具志堅、藤代。不明な点は多いですがこれ

でミツシヨンは終了します」

…嫌な予感がすると思い、黒鍵を構えて戦闘態勢をとる。足音と拍手の音と共に姿が現れる。

「君達がここまでやるとは思わなかったよ。私の一瞬の過ちが計画の想定外を生んでしまった」

「レフ・ライノール…」

『レフだつて!?!レフ教授がそこにいるのか!?!』

相変わらずダサイ服装と髪型だ。所長はあれを気に入ってるらしいが感性がおかしいに違いない。それに人外の気配がブンブンするぜ。こいつが今回の黒幕か。

「レフ…?ああ、レフ、生きていたのねレフ!」

「おい、落ち着け所長」

意識朦朧としながらレフの名前を呼び、縫ろうとする所長を手で制す。

「藤代?」

「危険だ」

「危険?だつてレフよ?貴方だつて一緒に働いてたじゃない」

「藤代さんに同感です…あれは私達が知っているレフ教授じゃありません!」

「生前よく見た妖魔の類に似ていますね…」

今にも歩き出そうとする所長を俺が抑え、牛若丸とマシユが前に立つ。

「そのサーヴァントらはよく感じ取ったというべきか。私が君達とは根本的に違う生物だとね。その人間——藤代航太——もまあわからなくもないか。異端者狩りのスーパールーキーと呼ばれているだけはある。それだけに殺しておかなかつた自分が愚かしい」

え？俺そんな痛い名で呼ばれてんの？超恥ずかしいわ。カレーシスターや阿婆擦れ執行者、麻婆神父よりましだけれども！ましだけれども！！

「まあいい。この特異点も直に消えてなくなる。その前にいいことを教えてやろう」
「いいことだと…？」

「人類は既に滅んでいる。この滅びは確定された未来だ。特殊な磁場で守られてる力ルデアも時間の問題だろう」

『外と連絡が取れないのは、取れる人間がいらないからか…』
人類滅亡——ドラマみたいな出来事に大樹やマシユは動けない。所長はまだ何を言われたか分からない様だ。

「う、嘘よねレフ…人類が滅んでいるだなんて…」

「嘘ではないさマリィ、いやアニムスフィアの末裔よ。貴様らの愚行がこのような事態を引き起こした。その報いは既に受け取っているみたいだがねえ」

「まさか所長は……」

「マリーは死んでいる。君がレイシフトの適正もないのにこの場に居るのがその証拠だ。君は死んでやっと望んだものが手に入った。意識体の君は肉体のないカルデアに戻った瞬間、意識が途切れ消滅する」

「あ、ああ……」

レフの言葉に所長は倒れこむ。その顔は青白く染まっていた。

「おっと、崩壊が始まったようだ。私、レフ・ライノール・フラウノスも鬼ではない。最後に祈る時間ぐらいはやろうではないか」

正直見逃されたと思う。まだブランクが抜けてない体では到底届かないだろう。奴は瞬く間に消えていったが、あれ奴自身の力なのだろうか……？

「地下空間が崩壊しています……！それ以前に空間が安定していません！ドクター！至急レイシフトをお願いします！」

『こつちも急いでいるが所長は……』

「何で……何で私だけ……褒められてもない、認めてもらってもない、評価されてない……どうすればよかつたのよ……！」

今レイシフトしても所長は帰れない。そのことが空気を重くする。この世界がギャグ漫画なら聖杯に酒を酌んで大騒ぎなのにな。残念ながら Fate 時空なんだすまな

い…ん？聖杯？

「来世に期待しましょう」

『決断早っ!?!』

「いや、でもねえ…蘇生なんて現代の魔術じや聖杯でも借りなきや…おやあ?」

「なんとお？主殿の右手にはその聖杯がー（棒）」

超下手な小芝居にのつてくれたライダーありがとう。後で撫でてやろうではないか。

『ああっ!?!そういうええそこには冬木の聖杯があるじゃないか！何とかなるかもしれないな
いぞー!』

「藤代さん!」

「航太さん!」

「主殿!」

「藤代!」

「「わっしよい!わっしよい!」」

「何胴上げしてるのよ!?!時間ないわよ!?!」

キラエライトに大樹、ライダーにいつの間にか戻ってきたアーチャーに何故か胴上げされる俺。所長に怒られるのも俺。この理不尽を許してはいけない（憤怒）

「では早速…」

「え、何そのえ」

俺は笑顔で聖杯を所長に入れた。その瞬間、世界は光に包まれた。

幕間 1

第五話

目を開けるとそこは！そこは！自室だった！知っている天井だ！

「いやいやいや、目覚めるの早すぎでしょ。私の予想ではもう半日は起きないと思っ
てたのに」

「む…」

思わず戦闘態勢を取り、声の方向へと振り返るとそこには絶世の美女が立っていたの
だ。

「よし、求めているリアクションどうもありがとう」

「…サーヴァントか」

「そうだね。君とも顔を合わせるのは初めてかな？私はレオナルド・ダ・ヴィンチ、カ
ルデアの協力者だ」

「そうか…女性かあ…モナリザそっくりだよ…」

なんかもう歴史の人物が女体化しても驚かなくなつたよね。アーサー王に牛若丸…
感覚狂つたなあ。

「経歴から見るとその臨戦態勢は身に染みついたものだね。異端者狩りのスーパールーキーの名は伊達じゃないようだ」

「そのあだ名はやめろ」

マジで恥ずかしい。黒歴史に匹敵するほどの恥部だ。

「他は？」

「マシユはロマンが検査しているね。大樹君は部屋で療養させているよ」

「所長は？」

「所長か…あれは天才の私でも手に余るものだね」

どういふことだろうか？ 聖杯との適合が失敗していれば聖杯だけは残るだろうが。

「マシユに近くになっている。決して同じものではないのだけれども」

「デミ・サーヴァントに酷似した何かか？」

「うーん、マシユは英霊の力に耐えられる器であり、ベースは単独で存在できる人間だ。だが、所長は…人間の霊基を恐らく聖杯の力でサーヴァントの霊基まで格上げ・強化されている。こう説明すると全く違う存在になっているね。ただ…」

「ただ…？」

「オルガマリィ・アニムスフィアは英霊になれる器ではないし、素質もない。彼女自身をただ強化するだけでは消滅するのがオチだろう。そこで聖杯は穴埋めに何かを接合・

融合させた：と思われる。暫くは目を覚まさないだろうし、最悪その何かに自我を飲み込まれる危険性がある」

「そうか」

「そつけない返事だね」

「運命に抗うのが今回のミッションだろう？」

人類史が現代いまに至るまでに、激動を生きた者たち。俺達が相手するのはそういう奴らだ。所長は死の運命を覆す為に戦わなければならない。

「確かに。何者かが仕組んだ七つの特異点を人理定礎コンプレクトするのがカルデアが目指す冠位指定だ。君は協力してくれるかい？」

「ああ、もとよりそういう仕事だ」

「今日はゆつくり休みたまえ。疲れはまだ取れてないだろうからね」

ダ・ヴィンチに促されたまま、瞼を閉じて睡眠に入った。ああ：微睡に落ちていく…。

*

彼が寝入ったのを見て、私は彼の部屋を出る。

「ふむ…」

彼が目覚めるまでに色々に見直してみた。素性に趣味、好き嫌い…改めて見るとどこかずれている。

「うーん…彼は一体何者なんだろうねえ。魔術刻印を受け取れない地位であるにもかかわらず時計塔に入学するも、聖堂教会に転籍して代行者に身を費やす。そしてカルデアに出走して今に至る」

彼自身は魔術だけを見ると冷凍保存されたマスター候補達に劣るだろう。それならカルデアに魔術師枠として入れるわけがない。だが、ここにいる。ここに来るための出来事は箔をつける為の作為的なものに感じる。それを仕向けたのは…、

「あーやめやめ。現代は神でもとつくに干渉できない時代だ」

それよりこれからの事を考えないとね。もう一人のマスターとマシユ君…問題はまだまだ多い。

*

再び目が覚めると牛若丸ライダールがいた。

「おはようございませす主殿。快眠のご様子でしたが」

「現状が悪夢だからな」

「成る程」

人類の未来は二人の手に託された。前でも今でもお断りな案件だ。FFやDQに出てくる勇者達が勝手に英雄譚を作り出すのが理想なのに。ああ面倒だ。

「それで俺のそばに居るといふことは何かあったのか？」

「いえ、私は今や雇われの武将。四六時中主殿の傍にて身を守るのが当たり前でしょう」

「そうか」

やはり価値観が違う。彼女の言い様も尤もであるが、違和感をぬぐえない。睡眠も食事も必要ないとはいえ、一日中張り付かせるのは精神上よろしくはない。俺のサーヴァントが複数いれば交代制にでもするが、彼女みたいに忠誠心に篤い者が都合よく来るわけでもないだろう。ならば…、

「ありがとう」

「つーい、いえ！それほどでも…」

こういう人間は素直に感謝の意を示すに限る。義経は兄・頼朝に邪険にされた人間だ。必要な存在だと伝えればコミュニケーションとしてはいいだろう。それと小動物系なら頭でも撫でればいいってばつちやが言ってた。本人も喜んで居るようなのでばつちやの進言に感謝しておく。

「それじゃ食堂に行くぞ」

「お供します」

季節感を感じられない建物の廊下を巡りながら食堂へと急いだ。

*

一方、その頃所長は…、

「こんにちはー！みんな元気にしてるかなー？タイガー道場が始まるよー！」

「何よこは…」

ピーヒャラピーヒャラとBGMが鳴り響く。和風の道場でオルガマリーは立っていた。
た。

「ここは哀れにも死に瀕した子羊を導くお助けコーナー・タイガー道場 in カルデア
でーすー！」

「誰が子羊よ！」

「さて…早速だがこのコーナーの趣旨を問おうと思う。答えよ、弟子一号！」

「押忍！このコーナーは人理滅却した世界を救おうとする人物を導く、言うなれば『カルデア』を支える大黒柱なのでありまーす！言わばここの『カルデア』そのものだと言っ

ても過言ではないのでしょーかー!」

「ここが私の『カルデア』!」

「マーヴェラス! ベラボール! おおベラボール!」

「ちよつと五月蠅いわよ!」

頭が痛くなつてきたとばかりに額に手を添える所長。哀れである。

「さて、今回のオルガマリーさんは…あつちやー、魔力の塊をぶつけられて意識を失っちゃったかー。このようなことをするのはさぞ自暴自棄で課金に嵌まっちゃやう駄目人間なんでしょーなー。そこんとこどうなのよ、弟子」

「問題ありませーん! 私のマスターは目がちよつと死んでるけど結構優しい人物なのだー!」

「マ・ス・ター! ちよつと弟子一号!! 私の許可なく『カルデア』に召喚されるとはどういう見だー!」

「ししよーはもう行き遅れだから是非もないよネ!」

「にやんだとー! このロリータがー! 本編よりもイベントで先に出演しやがつてー!」

「中途半端こそがいけないですよししよー! 分かりにくい伏線なんて誰も覚えちゃいなんですよー!」

所長そっちのけで言い争う。幼女と言い争う大人、シニールである。

「あらやだ！オルガマリーさんのこと忘れてたわ！性急で悪いけど今回の失敗の原因は何でしょうか！はい、弟子一号！」

「信頼する人間を間違えたことでーす！あんなギザギザを信頼するなんてよつぽど周りに心を許してなかった証拠！」

「その通り！何の不審も抱かず、盲目的に信じるなんて扱いやすい駒だって言ってると同義よ。人を見る目を養うようにしなくちゃね」

「うっ…」

「まあでも？一応Q&Aコーナーを兼ねているので悩みにはお答えしよう。弟子一号、今回の対策は？」

「押忍、積極的にコミュニケーションをとることでありますっ！他人と付き合うなら根気よく接し、どういう人物か確認してからするよーに！」

「はい、よくできました」

所長は心当たりがありません。レフしか信じてなかったのだ。レフだけを重用してきたのだ。レフしか見てなかったのだ。一人だけ最良するトップなぞ誰がついていくか。これでは誰からも信用してもらえない。

「あれししよー。このコーナーもそろそろ終わりらしいですよ？」

「何だどー!? 私の出番これだけ!」

「そうですねししよー。大人しくそこで私の活躍イリヤを見ておいてくださいねー」

「うがー!!!」

悩まし顔で思案する所長をほつといて喧嘩する二人。しかし、事態を重く見てすぐに喧嘩をやめる。

「時間ないんでちやつちやおわらせましょー!」

「確かに時間は有限なり! それじゃオルガマリーさん後ろを見てください!」

「…えっ?」

「アンタが俺を継ぐものか?」

所長の後ろに立っていたものの正体とは!?

第六話

食事をした後、ドクターの招集によって守護英霊召喚システム「フエイト」の前に集合した。勿論、俺と牛若丸^{ライダール}、大樹にキリエライトもいる。エミヤは…食堂で皿洗いをしていたな。

「さて、みんな集まったかな？早速だけどそろそろ次の特異点が特定できる」
緊張した空気が蔓延する。誰かのつばの飲む音が聞こえるほど静まり返った。

「今回は戦力増強が目的だね。冬木でも体験しただろうけど、サーヴァントを召喚してもらおう」

『はい。聞こえるかな？今から召喚に必要なものを配ろうと思う。ロマン！』

「はいはい…」

ドクターが配り始めたのは虹色の石三つと見覚えがある物だった。

「これは？」

「これは呼符と聖晶石さ。呼符は冬木でも使ったから省くけど、聖晶石は三つで呼符と同じ効果を発揮する魔力が籠った石ってところかな。大樹君もレイシフト先で見つけたら回収しておいてほしい」

「はい！」

「ははは、そこで気合は要らないさ。召喚時にとつといてくれ。触媒なんてないから召喚者と相性が良いサーヴァントが召喚されやすいが、万が一ってこともあるからね」

「触媒？」

「サーヴァントに所縁のある物のことです。それを捧げればそのサーヴァントが召喚されやすいそうです」

完全に運の戦いとなる。巷で人気なソーシャルゲームでは…ガチャっていうんだっけか？

「それ以上はいけない」

「ドクター？真顔になってどうしたんですか？」

「え？いや、なんでもないよ。石は藤代君が拾い、呼符はレオナルドがコールドスリーブさせたマスター候補に持たせた残骸から急遽用意したからまだ二人で一回分ずつしかない。それじゃ大樹君からやってみようか」

「は、はい！」

大樹が召喚サークルに石を投げ入れる。そうすると光が召喚陣を作り出し、召喚陣から出てきた三つの光の輪が回りだす。さらに召喚陣の中央にできた光の柱が俺達の視界を閉じさせる。まばゆい光の中に出てきた人影から声が聞こえる。

「問おう。貴方が私のマスターか」

それは冬木の黒き騎士王の声と同じだったが、青いドレスを身に包んだ清廉な姿。あれこそが正しき騎士の王の姿。

「は、はい。俺がマスター、です」

「ここに契約は成った。私の真名はアーサー王、アルトリア・ペンドラゴン。この契約が終わるまで、私は貴方の剣になりましょう」

「アーサー王……」

「冬木の時とは随分雰囲気が違うような……」

大樹とキリエライトは冬木との違いに戸惑っている。まあ、あの圧倒的な威圧感を身を感じれば困惑するのも当然だろう。

「あのマスター？何か不都合でもありましたか？」

「いや、不都合ってことでも……」

大樹は悩むがドクターに冬木の記録を見せるよう提案する。ドクターもそれを了承し、セイバーにそれを見せる。

「あれは私がもし暴君とふるまっていたらというIFでしょう。心の内側を聖剣が物語っています。冷徹であり合理的であり、私はあそこまで割り切れなかった……まだまだ未熟ということです。だが……」

「…?」

「こんな私でも助けになれるでしょう」

「よろしく」

互いに握手する二人。その前にマシユの方を一瞥していたが…盾を見ていた?

「次は藤代君の番だね」

どういふことだと思つたがドクターに呼ばれ、召喚システムの前に立つ。俺は呼符を投げ入れ、召喚されるのを待つ。先程の光景を繰り返し、中から出てきたのは、

「えつと、イリヤって言います。小学五年生です。一応…魔法少女、やっています、はい。うう、私なんかが役に立つのか分からないけど…でも精一杯、頑張ります!」

「ルビーちゃんもいますよ!面白かわいくやっていきましょう、グランドマスター!」

幼女^{イリヤ}と喋るステッキだった。おい…おいおいおい。ちよつ待てよ! (ホリ感)

「あ、ああ…よろしく頼む」

落ち着け俺。この幼女^{イリヤ}だつてサーヴァント、一応戦闘は出来るだろう。エミヤと騎士王は使い勝手のいいサーヴァントだし、ボスは大樹に任せようかねえ。そんな考えが出るほど頭が痛い。

「小学五年生…魔法少女?現代のサーヴァントかな?しかし、あのステッキは…」

「ドクター？」

あー、アイドルオタが魔法少女に反応したよ…俺も前じゃあんな風だったのかねえ。

「あ、あのマスターさん？」

「召喚は終わりだし、カルデアを案内しようか」

「は、はい！」

ドクターはキリエライトに任せてここを出よう。そう思い、三人を連れて廊下に出た。

*

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、小学五年生です。後、魔法少女やっています。よく分からないけどカルデアに召喚されました。

「ここが修煉場で…」

今はマスターさんにカルデアを案内してもらっています。見た目は怖いけど（パパと一緒で目が死んでるし）…ちよつと優しいかな？

後ろに着いてくるのは牛若丸さん。あの有名な源義経なんだって！…何であんな鎧なんだろう？

(しっかし、人類が滅亡しているなんてバイオレンスですねえ)

(私達の世界の未来とはまた違うみたいだけど…)

(世界の命運はイリヤさん達の手にかかっている!)

(あう、プレツシャーだよ)

「どうした?」

「な、何でもないよ!あ、なんでもないです…」

「そうか。次はこっちだ」

突然の奇行にも反応せず案内を続けるマスターさん。うう、気使わせちゃったかなあ

?

(イリヤさんやっちゃいましたねえ)

(ルビーが話しかけてくるからでしょ!)

「…」

(大体ルビーは…!)

「少し休憩しようか」

「え!は、はい…(うう…)」

(ぷくすくす)

これは完全に気を使わせちゃったよお。ベンチに座るマスターさんの隣に座る。

「大丈夫か？」

「え？」

「俺は25歳、君は10歳位だろう。でも、俺は人間で君はサーヴァントだ。俺は君の背中を押さなければならぬ」

「…」

「この旅で理不尽を知るだろう、涙を見るだろう、猟奇性を感じるだろう。君はその時立てるか？」

マスターさんの顔を見る。真剣な眼差し…ミユみたいに同じ強固な意志を秘めた眼。その眼を見た時、私の返事は決まっていた。

「私はサーヴァント。マスターさんが望むなら私…頑張ります！」

「…良い返事だ」

「では、お近づきの印に秘蔵のイリヤさん寝顔写真のスライドショーでも…」
「今すぐ削除なさい！」

「ふむ…これは…」

「マスターさん!？」

…色んな意味で近づけた気がします。